人がつながることで力が生まれる　地域交流ツアー

人と人がつながれるツアー

コープあいちでは、2012 年 6 月 2～4 日の 3 日間、岩手県の大船渡市と陸前高田市を巡る第 5 回地域交流ツアーを実施。今回は、コープあいちの組合員 31 人が参加しました。「行って帰って終わる交流ではなく、人々がつながることで、何か新しい力を生み出せる、そんな交流を目指しています」とコープあいち東日本被災地支援担当の岩本隆憲さんは語ります。

コープあいちの震災支援は、あいち・なごや東日本大震災ボランティア支援連絡会に参加することから始まりました。NPO 等との協働が、被災地で求められていることに的確に応える体制を整えることにつながったといいます。また、愛知県に避難された方の支援で大切にしているのが、一人ひとりに目を向けるパーソナルサポートという考え方です。こうした活動は、実は震災以前から取り組まれており、コープあいちを含め、県全体で安心して暮らせるネットワークづくりをすすめてきたといいます。愛知県内で協働してきたという基盤があったからこそ、震災後、愛知県内での活動と同じように、岩手県でも取り組むことができたのです。

コープあいちの第 5 回地域交流ツアーに参加した組合員の面々。

岩本さんは、被災地の現状について話してくれました。大きな仮設住宅では頻繁に物資支援やイベントが開催される一方、全く何も届かない小さな仮設住宅もあります。また、一般住宅や公営住宅などのみなし仮設の人々は、仮設住宅のイベントには参加しづらいのが実情です。支援者側も人数分の食材などを用意するので、仕方のない面もあるのかもしれません。しかし、このような支援格差が、かつて仲間意識のあった住民たちに亀裂を生じさせています。地元のことは現地の方がいちばんよく分かっています。当事者やその身近な皆さんと相談し、一緒に考え合わなければ何が必要なのか見えてきません。岩本さんは、「被災地に入る団体同士つながりながら、現地の市民団体や地縁組織に協力して支援を行なうというかたちが大切なのではないか」といいます。

友として受け入れ、心を開く

ツアー2 日目の午前、コープあいちの組合員一行は、陸前高田市の中心地を訪れました。かつて人々の営みのあった街がそっくり消え、廃墟となった建物が点在する光景に、参加者たちは言葉を失っていました。

中心地からほど近い洞の沢（ほらのさわ）地区を訪れ、地区長の金野彰（きんのあきら）

さんと交流しました。
「押し寄せてきた津波が、ほこりのようなしぶきを上げて、家を粉々にし、車を押しつぶし、すべてを飲み込んでいきました。目の前に見える陸前高田の中心地だけで、約 1,400 人が亡くなり、この地区は 84 世帯から 15 世帯に減ってしまいました」と金野さんは言います。

続いて金野地区長と同地区の住民「認知症に優しい家族支援の会」の会長である菅野不二夫さんを囲んで、七夕祭りに向けた打ち合わせが行なわれました。昨年、この地域の伝統的な七夕祭りは、開催が危ぶまれましたが、関係者の努力により無事開催されました。仮設住宅や県外に避難した住民たちも集まり、大いに賑わいました。住む場所は変わっても、人々の絆を維持し、再生しようとするこの地域のお祭りに、コープあいちは今年、一緒に参加しようとしています(大船渡市の夏祭り、盛町の灯ろう七夕にも)。

2 日目夜の懇親会では、陸前高田市観光物産協会の副会長である實吉義正（みよし・よしまさ）さんを招き、東北の歴史と東北人の心について話を聞き、交流しました。参加者たちは、教科書では語られない歴史を知り、東北の人々の心をより深く学びました。また、大船渡市にある新聞社、東海新報の木下繁喜さんから、あまり報道されていない被災地の現状を伺いました。土地の整備が進まず家や店を建てられないなど、本来住民の味方であるべき行政が復興の足を引っ張っていること。地元のゴミ処理場ではまかないきれない大量のがれきがあるが、全国の受け入れ先が少なく、復興が進まないこと。そんな状況の中で、現地の人々は、先の見えない不安を抱えていることなどを語ってくれました。

被災地で出会う人の多くは、表面上は笑顔でも、拭い去れない傷や不安を抱えています。弱音や悲しみを語り合える、家族や友人を失った人も多くいます。そして当然ながら、それぞれが異なる悩みを抱えています。コープあいちでは、不特定多数の人を対象にした取り組みではなく、一人ひとりに寄り添える１対１の交流を大切にしてきました。深く相手を理解し、自分のことのように考え行動することで、人は友として受け入れ、初めて心を開いてくれます。

支援ではなく協同

最終日、３班に分かれ活動しました。A 班は仮設住宅の草取り、B 班は県立高田病院の仲介で仮設住宅の人々が使用予定の農地の整備を行ないました。コープいわて気仙コープの開催したお茶会に参加させてもらった C 班は、仮設住宅の人々と交流しました。学生時代の思い出に花咲かせる参加者もいました。後で、お茶会を運営した飯塚理事からわざわざ連絡が届きました。「あの後とっても良いことがあったんです」「いつもは坂の上の会場までいつも車の送迎で行き来していたおばあさんが、『今日は気分がいいから、みんなと歩いて帰りたい』と元気に坂を下り帰って行かれました」その言葉のおかげで帰路空港に向かうバスの車内は温かい気持ちに包まれました。

今回ツアーに同行したコープあいち理事長補佐参与の向井忍（むかい・しのぶ）さんは次のように語ります。「昨年４月に陸前高田の街を目にしたとき、生協は何ができるかとか、個人で何ができるかとか、そういう次元の問題ではないと言葉を失いました。何をすればよいのかすら分からない中で、とりあえず人と人がつながることで、何かしらの解決の糸口が少しずつ見えてくる。これまでの活動は、まさにそんな繰り返しのなかでつくってきたのだと思います」現地の人々と共に、コープあいちは、答えのない難しい問題に、一緒になって取り組んでいます。このような活動を通して、被災地への取り組みは、支援ではなく協同なのだと気づかされてきたといいます。支援する側は、与えているのではなく、むしろ大きな力をもらっています。それは結果として、地域に本当に必要とされる、次の時代の生協を築く力にもつながっていくのではないかと思います。

仮設住宅の草取りのボランティアを実施。
この場所にひまわりの種をまく予定だという。